【堀田琴次先生古稀記念論文】

S. SHIGENO, M.D.: CHRONIC OTITIS MEDIA AND SCLEROSIS OF
THE TENPORAL BONE

慢性中耳炎と側頭骨の硬化

大分鉄道病院耳鼻咽喉科医長

重 野 鎮 義
シゲ ノ シス ヨシ

緒 言

慢性中耳炎が硬化した側頭骨に見られることから、慢性中耳炎は蜂窠隔壁の硬化を来し、遂に Kompakt な側頭骨を形成するものとの考えが尙一般に根強く信ぜられている。

慢性中耳炎患者のレ線像を見ると、ほとんど蜂窠抑制状態にあることは事実であるが、慢性中耳炎の中耳蜂窠の骨壁は、Sklerosierung を起すものでなく、化膿性の炎症は粘膜内に止るものがあつて、著者は先に、“慢性中耳炎と Pneumatisations-hemmung” の論文を会報に発表した。

又骨壁に吸収所見は見られるが、これは粘膜の変化と関係のない生理的な含気腔の Umbauprozess であることも附言した。蜂窠发育抑制例に慢性の中耳炎は起るが、慢性中耳炎によつては蜂窠の Sklerosierung を来すものではない事を立証した。この関係を更に確實に証明するには慢性中耳炎罹患前後のレ線像を比較観察するより他に方法はないのである。然しこれは極めて困難なことであつて未だ文献を見ない。

長大では中耳炎の既往歴を持たない生後9ヶ月の乳児を撰び蜂窠の发育状態を毎年レ線的に観察しているが、その中で2例がその途中にたまたま慢性中耳炎に罹患したので、その前後の蜂窠のレ線像を比較することが出来た。この患者には更に手術を行つて、組織学的にも観察することが出来たので、この側頭骨の慢性炎症問題に貴重な資料を提供するものとして、こゝに報告する次第である。

症 例

生後1年(28年10月)の観察では鼓膜所見に異

I 山本高子 2才

レ線撮影月	局所所見	レ線所見	
		R	L
28年10月	鼓膜正常	Pn. Gut (+) Mist Z (+) Schupp Z (-)	Pn. Gut (+) Schupp Z (+) Mist Z (+)
29年10月	左鼓膜大穿孔 患耳身属多量	少々拡大	少々拡大
30年2月	左半根治術施行	殆んど同大	殆んど同大
30年10月			op Höhle

常なく、レ線所見では右側に蜂窠の発達を示す明るい円型の輪郭あり、鱗部蜂窠は欠損、左側は蜂窠群の发育は悪いが、鱗部蜂窠群の发育は良好である。更に1年後に(29年10月)左慢性化膿性中耳炎を発病したので、4ヶ月後(30年2月)に手術を行つた。結核性であることを確めた。

手術所見は、蜂窠の发育は比較的良好で中央に乾酪様塊あり、周囲蜂窠壁脆弱にして、粘膜は肉芽様に腫脹。

組織所見は、上皮は cubisch 又は扁平で腔内には分泌物の塊あり、上皮は一部破壊されている部分も認められる。

上皮下層は一般に各蜂窠ともに厚く、なかには厚い myxomatös な組織が存在しているものもある。

上皮直下には円型細胞の浸潤の極めて強い部分も認められるが、何れも浅い層の間であつて深層にはほとんど浸潤が認められない。myxomatös な組織には、小、中円型細胞、組織球、星芒状細胞等が認められ、又毛細血管も多い。血管周囲には他の部分と比較して細胞浸潤が特に強く認められる。

周囲の骨組織は総て幼若であつて、Ostesblasten による骨の増殖所見はほとんど認められない。之に

残存である myxomatöse Gewebe が上皮より離れた隔壁間に存在している。この部分には上皮直下に見る様な円型細胞の浸潤は深層に行くに従つて減少し、ほとんど認められなくなる。唯血管周囲にのみ細胞の浸潤が認められる。

斯る部分に接する骨壁には炎症性の骨の増殖、吸収, glatte Resorption の像は全然認められず、之に反して Osteoklasten を伴つた骨の生理的吸収所見 lacunäre Resorption の像及び Osteoblasten による骨の増殖所見が認められる。

幼児に於ける蜂窠壁の生理的骨吸収、増殖所見は、成人に比して遙かに盛んである。又幼児に於ての骨吸収所見は、増殖所見よりは遙かに強く見られる。この2症例に於ても吸収所見は増殖所見より遙かに強い。これは含気化の進展を意味しているものである。然しこの両機転とも粘膜の変化とは全く関係なく、生理的な含気化活動がなお行われている事を示す所見である。

結 論

2才, 4才の幼児の2症例に於て、慢性中耳炎罹

患前後の数年のレ線写真と、その手術時摘出標本の組織学的所見とを観察して、慢性中耳炎によつては側頭骨の硬化は起るものではない事を重ねて証明した。

文 献

- 1) Wittmaack: Über die normal u. pathologische pneumatisation des Schläfen-bein 1918.
- 2) Knick u. Witte: Arch. f. O. Bd. 119, 1928.
- 3) Ziegler: Zeit. f. H.N.O. Bd. 39, 1936. 4) 後藤(敏): 日耳鼻, 56巻, 12号. 5) 重野: 日耳鼻, 58巻, 5号. 6) Mittermaier: Zschr. f. H. usw. H. Bd. 42, 1937.

摺筆するに臨み御懇篤なる御指導御校閲を賜わりし恩師後藤敏郎教授に深謝致します

(原稿到着＝昭和 31.3.22 日)

重野論文附图

第1図 上皮下層及び骨の生理的吸収所見

第2図 myxomatöse Gewebe 及び骨の生理的吸収所見

第3図 小蜂窠とその上皮破壊部位 (a) と骨の生理的吸収所見 (b)

第4図 第3図 (a) の強拡大細胞の腔内遊走を示す